

「カストロの尼」(スタンダール)

十六世紀イタリアは有力な豪族や富裕な大市民達が各地に割據して權勢を競つてゐたが、その中であつて、森に住む「山賊」達も民衆の味方をしたり豪族同士の争ひに加はつたりして活躍してゐた、そんな時代の話である。

アルバノの町の豪族の美しい娘で十七歳のエーレナがカストロの尼僧院の寄宿生活を終へ町に戻ると、山賊の息子で二十二歳のジュリオが彼女を見て忽ち戀に落ち、やがて二人は熱烈に愛し合ふ仲となる。エーレナの父のカンピレアーリ卿や兄のファビオは激怒して仲を引裂かうとするが、卻つて二人の心は燃え上る。だが、密會を重ねてもエーレナは「純潔」を守り、「狂はしい戀にもえた若い心の錯亂」に陥つても「心は清らかであつた」。

そんな折、豪族同士の戦鬪が起り、敵味方として加はつた戦場でジュリオはファビオを突き殺す。怒つたカンピレアーリ卿は娘をカストロの尼僧院に閉込めて了ふ。ジュリオは尼僧院に

走り、脱出して結婚しようとしてエーレナを誘ふ。が、兄殺しの下手人と結婚したら母親が如何に歎くか、さう思つてエーレナは躊躇する。ジュリオは怒つて彼女を掠奪すべく手下を集め尼僧院を襲撃するが失敗、重傷を負つて逃亡する。エーレナは躊躇した己れを悔い、ジュリオに會つて詫びたいと願ふ。

が、娘の然るべき結婚を望む母親の策動によつてジュリオは死んだものとされ、それを信じて絶望したエーレナは尼僧院の居室に引籠るが、父親が死んで莫大な遺産を相続し王女のような生活をしてゐる裡に、「救ひのない不幸と長い退屈に打ちひしがれた」心に「虚榮の感情」が忍び寄る。尼僧院長になつて權勢を揮ひたいと思つたのだ。そして二年後、母親の畫策によつてエーレナは思ひを遂げるが、不幸と退屈は癒されず、三十歳になつた彼女を戀する青年司教に「遊びの氣持」で身を任せ、妊娠し、それが發覺して處罰され、修道院の地下牢に一生閉込められる事となる。

一方、ジュリオはエーレナの母親が流した嘘によつてエーレナが結婚したものと思込み、戀の痛手を忘れるべく、スペインで頗る英雄的に振舞ひ、今はリッツァーラ大佐として勇名を馳せてゐたが、故あつて歸國する事になり、その報知がエーレナの地下牢にも届く。ジュリオが

生きてゐると知つて彼女は「狂氣」同然となり、母親が地下道を掘つて救出に來ても、よくも自分を欺いて墮落させてくれたとて母親を詰り、不幸と退屈ゆゑの己が墮落の來し方を正直に認めた手紙をジュリオに遺して短劍で心臓を刺し貫く。

「小説とは大道に沿つて持ち歩かれる鏡の如きもの。諸君の目に青空を映し出す事もあれば水溜りの泥濘を映し出す事もある」と「赤と黒」にあるが、この作品にも人生の「青空」と「水溜りの泥濘」とは共に鮮やかに描かれてゐる。スタンダールの所謂「情熱戀愛」に命を懸けてゐる時のエーレナは純潔な女としての清らかな幸福、狂ほしい迄の充實感を味はふが、他方、戀人が死んだと思込み生の目的を見失つて、安逸な生活の下「退屈」に心が蝕まれると、「虚榮の感情」や「遊びの氣持」に押流され自己嫌惡に苦しみ不幸になる。幸福の本質をスタンダールは生涯追究した男だが、「パルムの僧院」の主人公ファブリスも戀する女の傍にゐられる幸福に浸る爲なら殺される危険のある恐しい牢獄に留まりたいと願ふ。スタンダールの主人公達は危険や束縛や障礙があつてこそ生の目的を強烈に自覺して幸福になるのであり、我々讀者はG・オーウェルの云ふ「人間は安樂、安全、苦痛の回避以外何も望まぬ」とする「快樂主義的人間觀」の「欺瞞」をとくと知らされる事になる。

（カストロの尼、宗左近譯、角川文庫）